經濟倶樂部講演

—神戸—

特228
392

日本重工業の國際進出に就いて

小島精一君

—1—

昭和十三年五月八日發行

始

特228
392

神戸經濟倶樂部講演

第一輯

神戸經濟倶樂部
神戸市神戸區榮町通昭和ビル
電話三宮一八〇二番

神戸經濟倶樂部講演第一輯目次

日本重工業の國際進出に就いて

小島精一君

はしがき……一
日本産業生産に於ける重工業の位置……一
日本重工業生産の國際的位置……三
日本重工品の輸出の動向……六
國内生産と輸出の割合……七
重工業の増産計畫と輸出増進の急務……一〇
尨大な世界市場へ喰ひ込んで行け！……一三
日本鐵鋼業の國際闘爭力……一四
機械工業も大いに有望……一八

神戸經濟倶樂部藏書
第一輯
昭和五年一八〇二號
神戸經濟倶樂部

目　次

なるべく加工化して賣り出せ！……二〇
支那の重工品吸收力……二一
今後は益々擴大する！……二四
支那に於ける日本の重工品の進出……二五
重工品輸出の促進工作……二七
長期資本輸出が先行條件……二八
（附錄）重工業に關する若干の統計資料……三一

日本重工業の國際進出に就いて

昭和十三年三月二十四日神戸經濟倶樂部定例晩餐會に於て

小島精一君

はしがき

御承知の如く最近數年來、日本の産業發展は主として重・化學工業を中心として行はれて居ります。これは、大體國内の軍事的な事情――即ち軍擴に順應して進められてゐる譯であります。併しながら今後數ケ年經ち、生産力擴充工作が一段落する場合には當然海外に進出して行き新らしいマーケットを開かなければならない運命を有つて居ると思ふのであります。それで最近その問題に就いて少しばかり調べました材料を御參考のためにお話して見たいと思ふのであります。

日本産業生産に於ける重工業の位置

大體御承知のことでありませうが、前置きとして、最近數年來重工業が日本の産業構成の上にどういふ位地を占めるやうになつて來たかといふことを、極くざつとお話致しておきたいと思ひます。今から約十年前昭和四年の工業生産を採つて見て、その中で紡織業と重工業の割合を調べて見ますと、紡織業の生産額は約三十二億圓、重工業と普通いはれて居ります金屬工業が六億圓機械工業が八億圓、それに化學工業が十億圓、此の三者を合せて二十四億圓であります、でありますから重工業はなほ紡織業よりも遙かに小さかつたのであります。それが最近即ち滿洲事變以來非常に變化を來たしまして、數日前手に入れました商工省の工業統計の速報によりますと、昭和十一年に紡織業が三十六億圓の生産で昭和四年に比較して僅か四億圓の增加に過ぎないのでありますが、それに對して金屬工業は二十二億圓、機械工業十七億圓、化學工業二十一億圓、合せて六十億圓といふ巨額を生産致して居ります。即ち重工業の方は昭和四年に對して三倍近くに上つてゐるのであります。更に、之を紡織業に對比してみると、約倍に近い大きさの優位を占めるやうになつて來たことが判るのであります。然もその後も年々非常な加速度的な勢ひで增産を進めて居るのであります。さういふ譯でありますから、遠からず日本の産業構成は重工業中心といふのに全く相應しいものになつて來るであらうと考へられるのであります。現に全工業生産高中、紡織業の占める%は六年の三七%から十一年には二九%臺へ下つてゐるのに反して、重工業の方は同じ間に三四%から五〇%に迄躍進してゐるのであります。從つて今後の産業發展に於ても、今までのやうに輕工業ばかりでなく、段々重點が重工業の問題に移つてくるやうになるのでなからうかと考へられます。

日本重工業生産の國際的位置

そのやうに日本の重工業は非常に進んで參りましたが、これを國際的な位地といふ點から考へて見ますと、まだ精々二流國以上には出てゐないやうであります。先づ基本的な鐵鋼生産に就いて日本は――滿洲を含め――世界一流國と如何なる割合で對抗してゐるかと申しますと、昨年の生産の數字に於て、先づ銑鐵をみますとアメリカが三千七百萬噸ドイツ一千六百萬噸、イギリス九百萬噸、フランスは八百萬噸の生産を示して居るのに、日本は滿洲を含め僅か三百萬噸でありますから、從つて米國の十二分ノ一、ドイツの五分ノ一といふ低い狀態であります。スチールの

方になりますと、日本はもう少し地位が上つてきます。昨年のスチールの生産高は、アメリカ、五千二百萬噸、ドイツ、二千萬噸、イギリス、千三百萬噸、日本はそれに對して六百萬噸であります。かうみるとスチールの方でさへもイギリスの半分、ドイツの三分ノ一弱といふ處までしか達して居りません。人口一人當りの鋼材消費高でみても昨年米國は八四四ポンド、英獨兩國は夫夫五五〇ポンド見當だつたのに、日本は二九八ポンドに止まつてゐる有樣です。だから此のスチールにしてもまだ二流國以上には達してゐないと見ることが至當ではないかと思ふのであります。

今度は加工部門に入りまして機械の生産額を調べて見ますと——外國の新らしい數字がなく、一九三六年ソヴエートで調べたものでありますが、それによりますと——ソヴエート・ロシアの機械の生産額は二百億ルーブル（但し一九二六—七年の價格を基準としたもの）であります。それに對してドイツは百五十億、アメリカの數字は一九三五年のものしかありませんが、實に三百七十億、で勿論世界第一です。それに對して日本は僅か三十六億ルーブルでありますからアメリカの十分ノ一、ドイツの四分ノ一、といふやうな低い位置に止つて居ります。さういふ譯でありますから日本の重工業が最近非常に發達しては參りましたけれども、數量的に見ましてさへも（勿論質的に見れば、なほ更さういふことがいへるかと思ひますが）數量的に見てもまだ先進國のレベルから見るとかなり劣つたものであるといへると思ひます。

たゞ、日本の强味はその躍進的テンポであります。此點では日本は最近非常に著しく列强を追ひ越してすばらしい急激なテンポを以つて進んで居ることは事實であります。

この前の景氣の絶頂であつた一九二九年と昨年度の間に、先進一流國が（ソヴエート・ロシアを除いて）舊水準をどれ程突破したかといふとロシア以外には二九年の水準を突破したものは餘りないのであります。殊に先進國七ケ國の綜合的な數字を調べて見ますと、一九二九年が約一億瓲の產鋼高で之を一〇〇と致しますと、一九三七年は九八、卽ちまだ水準を突破してゐないことになるのであります。それに對して日本の方は一九二九年に對して昨年は約三倍近く——卽ち二一・七倍になつて居ります。これでみても非常な勢ひで發展してゐることが判ります。さういふ譯で段々と一流國に近付いて行くことも遠くないと思ふので此點は新興國の心强さを覺える譯です。そこで次に國際市場に就て、日本の重工業といふものはどんな位置を占めて居るかといふことをお話して見たいと思ひます。

日本重工品の輸出の動向

重工品は先程申しましたやうに鐵鋼金屬、機械、それから化學工業——所謂國防産業といふ意味で之を廣く採りまして化學工業も含めまして、綜合的に日本の重工品の輸出はどんな具合になつて居るかといふことを先づ調べて見ますと、滿洲事變前の昭和六年に、これらのものを綜合致しまして、日本から外國に出してゐた輸出總額は約一億圓、之が十二年には五億四千萬圓に上つて居ります。之は事變後主として滿洲支那に向けての特別な輸出が殖へたのであります。その中で最も代表的であり且つ輸出の時も激增してゐる機械・器具といふものの輸出額を調べて見ますと、昭和六年の三千萬圓から昨年は約二億三千萬圓といふ大きさに上つて居ります。ところで此の重工業品の輸出が日本の全輸出貿易の中で一體どの位の割合を占めて居るかといふと、昭和六年には約八パーセントでありましたのが段々上つて來まして、昨年は一七パーセントを占めるやうになつて參りました。ですから、輸出中の割合からいつても日本の重工業品が全體に於て占めてゐる割合といふものはかなり急速に向上して參つて來て居るのであります。併しながら先程申しました生産の統計に於ては全體の五割も占めてゐるとを考へると輸出の割合はなほ極めて低いとが分るのでありまして、海外進出は今後の努力に俟たなければならない譯であります。これは御承知の如く最近の生産擴張が專ら國内の軍需的な目的のために行はれて居るためで、輸出するにも餘剰がないといふことから來て居るのではないかと思ひます。そこで、更に輸出の市場別の統計を調べて見ますと、代表的な機械器具を採つて見ますと、大部分は滿洲と支那に向けられて居ります。殊にその半分以上が滿洲に向けられて居り、その他は支那、又は英領印度、或は北鐵の引換に蘇領アジアに向けて多少輸出してゐる程度でありまして、滿洲と支那を除いては殆んど他にこれといつて注目する程大きなマーケットはまだ開拓されてゐないのであります。さういふ譯で生産は相當進んで參りましたが、國際市場に於ける位置といふ點からいひますと、日本の重工業はまだ極めて幼稚なもののやうに思はれます。滿洲とか支那といふ特殊市場以上には殆んどその販路を見出すに至つてゐないといふことがいへるのであります。

國内生産と輸出の割合

それから重工業の中で、基本的な鐵鋼業と、加工的な機械工業とを分けて國内の生産と輸出の割合とを調べて見ますと、先づ鐵鋼品の國際取引といふ點から見ますと、鋼材の方に於ては、最近は輸出が多少殖へましたため出超になつて居ります。十二年の統計はありませんが、十一年を調べて見ますと、鋼材の輸出は八千三百萬圓、これに對して鋼材の輸入は五千四百萬圓でありますから約三千萬圓程の出超になつて居ります。併しながら鐵の原料部門に於て非常に大きな入超を來たして居ります。即ち鑛石が四千萬圓、銑鐵が約四千萬圓、スクラップが八千萬圓といふやうな大きな輸入を致して居るので、全體の鐵鋼品貿易のバランスといふものは輸入の二億三千萬圓に對して、輸出は僅かに九千萬圓弱といふやうな譯でありまして、一億五千萬圓近くの入超を來たして居る有樣なのであります。でありますから今後鋼材の輸出を促進すると同時に、鑛石類をブロック圏内で自給し、銑鐵の自給なども漸次進めるやうにして行くことによつて鐵鋼品の輸出入のバランスを今までとは逆に出超にする必要があるのであります。もし、之が出來ると相當これは國際貸借のバランスの點からいひますと大きな貢獻をなし得ることになると思ふのであります。そこで日本の鋼材の輸出と生産との割合を調べて見ますと、大體過去數年來、全生産額の

中で約一割見當が海外に輸出されてゐるやうになつて居ります。昭和十一年は國内生産が四百五十萬噸で、それに對して輸出が四十五萬噸であります。年度によつて多少の違ひはありますが、過去數年間を調べて見ましても、輸出と生産の割合は大體に於て一割前後の見當になつて居ります。處が銑鐵の方は輸出は殆んどないのでありますから、鐵鋼の全生産と輸出といふ點になると此の割合は更に相當低下する譯です。先進國になりますと、イギリスでも、ドイツでも、フランスでも、國内の生産高に對して海外に輸出されるものの割合が少くとも二割乃至三割といふ率に上つて居ります。例へば、昨年のイギリスの統計を調べて見ますと、鋼の生産高が約一千三百萬噸、これに對して輸出が二百六十萬噸、二割强になつて居ります。ドイツの生産高は一千九百萬噸、輸出は三百七十萬噸、これも二割弱であります。最近はドイツに於いても、イギリスに於いても國内の軍擴需要が大きくなつたため、輸出はそれだけ抑へられて居りますが、それにも拘らず二割見當の輸出をして居るのであります。多少景氣が惡くなれば輸出の割合は勿論それよりずつと大きなものとなると見ていいのであります。さう致しますと、日本の輸出の生産に對する割合は、列國に比較してなほ遙かに劣つて居る。生産高が低いのみならず輸出の割合も甚だ低いの

であります。

重工業の增産計畫と輸出增進の急務

そこで今後御承知の如く、鐵鋼は增産計畫に於て、數年中に日滿支合せて一千百萬噸にするといふ新らしい計畫が樹てられたやうであります。かりに、將來その二割乃至三割一見當を輸出することになりますと、約二百萬瓲乃至三百萬瓲の鋼材の輸出をしてやつと先進國の先例に追ひつけることになるのであります。先進國並みのレベルにそれでやつと達する譯なのであります。ところが今日の輸出はまだ五十萬噸でありますから、之を五倍位にまで擴張するといふことを、數年後に於て期待し、又その程度まで擴張させなければ、一千萬噸生産計畫といふものは順調にこなして行くことが困難となるのではありますまいか。

次に機械の方になりますと、最近生産は非常に殖えて居りまして、ダイヤモンド誌が最近號（三月二十一日號）で發表して居ります推測の數字によりますと、全機械器具類の生産額は、昭和六年の四億圓から十二年に十九億圓にまで上つて居り、この六年間に於ける增加は約四・三倍

に達して居る。斯ういふ風な急激な生産の增加に對應して、機械の輸出はどうなつて居るかと見ますと、やはり昭和六年の三千萬圓から、昨年は約二億三千萬圓に達してゐる。さうすると、此の輸出の方は昭和六年から十二年までに約七・四倍に上つて居る譯でありまして、貿易は極めて急激な增加をしてゐるやうに見ることが出來る。先程鐵鋼品では貿易の方から見ますと、一億五千萬圓からの入超になつてゐると申しましたが、機械に於ては幸ひに最近は出超になつて居り、昭和十一年から出超に轉じて居ります。昭和十一年が約千七百萬圓、昨年が三千四百萬圓からの出超になつてゐると見られて居ります。併しながらこれも大部分が滿洲行き及び一部分は支那行きといふ風に限られた特殊市場でありますし、機械の中でも、その主たるものは紡績機械及び車輛といふものであります。他は知れたものであります。そこで機械の生産に對する輸出の割合を調べて見ますと、最近の率を擧げてみても、大體一割見當であります。昭和十年の數字を採つて見ますると、生産十四億圓に對して輸出が一億五千萬圓といふ譯で一割、十一年も生産十七億圓に輸出一億七千萬圓でこれも大體一割見當であります。ところが先進國の例は鐵鋼と同じやうにやはり二割乃至三割の輸出を致して居るので、その點に於ても、日本の機械がまだ海外に進出し

て行つてゐる割合が、生産の増加に較べて甚だ低いと云ふことを立證出來ると思ひます。殊に紡績機械が昭和十一年に於て一割五分、車輪が二割六分といふ大きな特別の高い率の輸出を致しました以外は原動機は僅かに四パーセント、電氣機械數は四パーセント、精密機械類は九パーセント、工作機が六パーセントといふやうな甚だ低い輸出割合でありまして、斯ういふ精密機械部門に於ては今後輸出増進の餘地がそれだけ非常に多いのであります。又輸出させなければならない必要もある譯であります。そこで機械類に於ても今後數年間に生産の倍加を行ふとすると國内の機械生産豫想額は三十五億乃至、四十億圓近くに上るであらうと思ひます。その二割を先進國の例に慣つて海外に輸出するとしても、七億乃至八億の輸出をしなければならないといふことになるのですから現在の輸出額約二億圓、それに比較して、やはり四倍近くの大きさにまで擴張する必要があるのであります。斯ういふ風に調べて參りますと、基礎的部門に於ても加工的機械部門に於ても日本の重工品は今後生産擴張工作が急激に進むに連れて海外への輸出を相當急速に發展さすのでなければ、これを國内だけで消化するといふことは難しくなる。今日のやうな特別な事情の下に於てはとに角と致しまして、ノルマルな狀態になりますと、餘程大きな困難がそこに生じて來るものと思ひます。從つて輸出促進の問題は今後の貿易政策に於て非常に重要な位置を占めて來るのではないかと思ふのであります。東洋經濟新報などでも、この問題には非常に注意をされて、相當前から社論その他でこの問題を論じてゐられたやうに記憶してゐます。

大體今日に於ては、先進國の重工品の輸出に比べて日本は僅か四分ノ一乃至それ以下の低い位置しか占めてゐないといふ狀態でありまして、生産に於ては二流國といへませうが、貿易に於てはまだ第三流國を出でないのであらうと思はれるのであります。

尨大な世界市場へ喰ひ込んで行け！

少し古い統計でありますが、綜括的な世界統計が手許にありませんので止むを得ず昭和九年の世界列國の中、先進一流の數ケ國――日本を除く――が海外市場にどれだけ重工品の輸出をしてゐたかを調べて見ますと、日本の圓に換算して、鐵鋼類に於ては二十五億圓、機械は二十六億圓、船舶、自動車は十六億圓、化學工業品十八億圓、合せて八十一億圓になります。これが昭和九年に於ける一流重工業國の輸出の合計であります。尤も日本に賣込んだ額は之には省いてあります。

これに對して日本が海外に輸出してゐた額は、昭和十年の統計に於ても、鐵が六千五百萬圓、機械が六千四百萬圓、船舶、車輛が五千五百萬圓、化學品が八千萬圓、合せて二億七千萬圓弱であります。先進國の統計は昭和九年でありますから、それ以後の昭和十年、十一年度になると相當の割合で殖へて居るものと見なければなりません。正確な數字はありませんが、昭和九年に於て八十一億圓でありますから、恐らく十一年度には百億は突破して居るのでなからうかと思ひます。これに對して日本の方も勿論殖へて居ります。昭和十一年には四億圓位に上つて居ると思ひます。それにしても一流國の占めて居る國際市場に比べれば僅にその四パーセントを日本が今日占めて居るに過ぎません。これから先進國の此の百億圓のマーケツトに日本がドシ〳〵喰込んで行く必要があります。假りに百億圓の中一割喰込んで行くとすれば十億圓日本の輸出を增すことが出來るのであります。かくの如くこの部門に於て進出して行くべき未開拓のマーケツトは大きいのであります。

日本鐵鋼業の國際競爭力

そこで問題は、日本の重工品が外國の重工品に比較して競爭能力があるかどうかといふことであります。機械の方は暫く別として、少くとも鐵鋼品に於て、日本は先進列國に較べればまさつて居るとも劣ることは絶對にないと考へられるのであります。それを數字によつて申しますと、鐵鋼業に於ける世界輸出のチャンピオンといはれてゐたイギリスと大陸のカルテルこの二つの相場を調べて見ますと鋼材の標準的な丸棒を採れば、イギリスのものがどの位の値段で輸出されて居たかと申しますと、今日は非常に高くつて、イギリスの港渡し一噸當り十一ポンド、これは勿論ノルマルではありません。一九三五年頃の市況を假りにノルマルと見て、その時はどの位の値段であつたかといふと、約八ポンドであります。それから世界恐慌の時の底値は幾らかといふと、一九三二年第三・四半期の値段が約六ポンド半といふのが一番安値であつたやうであります。次に大陸物は御承知のカルテルが輸出のため、非常なダンピングをやつて、國内値段よりもうんと値下げしてゐます。殊に東洋向けには半分位の値段で投げ賣をして居ることがある。その大陸ものゝアントワープ渡し噸當り丸棒の値段を調べて見ますと、一番安かつた時がやはり一九三二年の第三・四半期で、その時四ポンドであつたのであります、即ち八十志、今日の爲替で日

本の金に換算してみると七十圓前後であらうと思ひます。これは世界恐慌の最もひどい底値であり、一番安かつた時のことであります。ノルマルな時はそれより相當高いものと見なければなりません、投げ賣りをして國內市場の半分近く賣つた恐慌の底の値段が八十志、約七十圓と見て大した間違がないと思ひます。現に我が國への輸出値段を調べて見ますと、商工省の統計で一番安かつた時が昭和七年七月でありまして、冲着値が四ポンドであります。それで今後と雖もノルマルな狀態に復歸してのち恐らく四ポンド以下にダンピングして來るといふことは、特別なことがなければ先づないと見ていゝと思ふのであります。ところで、日本で鐵を造るのに、最近一貫作業の工場が旺んに出來て參りましたが。どの位のコストで出來るか、今日は非常に高いに決つて居りますが、これがノルマルな狀態に復歸したときどの位か。嘗て日本製鐵が出來る時議會でコストの問題が喧しく論ぜられた時、銑鐵噸當り大體三十圓ならば出來るだらうといふことであつた。今日專門家に訊いて見ますと、もつと安く二十圓代でも出來るさうです。副產物の回收も段々と進んで來るし、いろ〳〵なコスト節約の技術も進んで參つてますから、ノルマルな狀態になれば安くなるだらうと思ひます、殊に輸出向の、外國と競爭をするといふ建前のものになれば、滿洲

では大連とか、さういふ船積の具合のいゝ所に大きな工場を造つて、輸出向きの鐵を造るとすればコストは安くなる。この間も昭和製鋼の某氏に會つて話した時、將來大きな輸出向けの工場を海岸にでも造つてドン〳〵外國の市場に進んで賣り出して行く考へである。といふことでありました。さういふことをやれば、これは相當安く出來るものと見ていゝ。假りに銑鐵が二十五圓で噸當り出來るとして、丸棒として恐らく五十圓臺ならば出來るのでないかと思ひます。さう致しますと、先程申しました外國物の恐慌の底に於けるダンピング値段が七十圓だといふのに對して日本の鐵のコストといふものは、別にダンピングしなくとも立派に對抗してやつて行くだけの安さであると樂觀してよろしいのであります。それはその譯でありまして、鑛石は非常に安いものが、滿洲なり、南洋から、安い運賃で以つて運んで來られますと、勞働力も馬鹿に安い。最近アメリカの鐵鋼協會で發表致しました數字は、これは少し不可解な處もあると思ひますが、それによりますと、一時間當りの職工の勞働賃銀は、日本が約八仙であるのにアメリカは七十仙であかるら九倍です。イギリスは三十五仙で四倍以上です。斯ういふ風に日本の勞働者の賃銀といふものは非常に安い——といつて別に能力がさう劣つて居る譯でもないのであります。そ

れから工場が海岸線近くにあつて、輸出に非常に便利である。アメリカはイギリス等に比較して不利なのは海岸線に製品を持つて來る運賃が非常に割高につく。二倍乃至、三倍にも上る譯で此點非常に困難を感じて居ります。ドイツもイギリスに比較すれば、その點條件が劣つて居る。イギリスは技術が古いし、賃銀が非常に高いといふ缺點がありますが、工場の位置が非常に好いために輸出市場ではかなり雄飛して居ります。日本は今申しましたやうに、原料は安く手に入り勞働費は非常に低く、技術は最近出來た優秀な工場を有つて居りまして、輸出には非常に便利な位置を占めて居るのですから、コストを安くして外國に喰ひ込んで行く十分な闘爭力はあるのであります。最近では、外國の專門雜誌を御覽になりますと分りますやうに、日本の鐵工業の海外進出といふものが非常に不安の種になつて居るやうで盛んに論ぜられております。

機械工業も大いに有望

機械の方になりますと、これはなほ技術上日本は改善しなければならないものも非常に多く有つて居るやうであります。或は材料に致しましても、特殊鋼材が日本は十分良いものがないといはれる。併しながら特殊鋼材がないといつてもタングステンなどは日本及び、日本の勢力範圍内に於て、世界の極めて優秀な資源を專有してゐるのですから、今後それらを開發すれば特殊鋼材に於て、日本が先進國に劣るやうな理由は豪もない譯であります。唯精密なマシンツールがないとか、ゲージ類の發達が遲れてゐるとかさういふやうな精密な加工部門に於てはなほ改良すべき點が多々あるのであります。併しながら大河内正敏博士は、日本の勞働者は機械工業勞働者として不適當なものでない、むしろ大いに適格のものであるといふことをいつて居ります。原料も決して高い譯でなく今申したやうに主なる原料の鐵が將來安く手に入るやうになりますし、それから勞働者も決して劣つてゐないといふことになれば、技術の進歩に連れて、漸次精密機械工業方面にも發展して行く可能性があるのではないか。國内のマーケットが小さいため、外國へダンピングして損をすると、その損をカバーするだけの國内獨占領域がないといふことは貿易政策上一つの大きな難點になつてゐたやうであります。幸ひに滿洲及支那の市場に優越した地位を占めてゐるといふことになれば、今後の貿易政策のやり方如何によつては上述の缺陷も補はれて行くやうになるのではないかと思ひます。

なるべく加工化して賣り出せ！

次に今後重工業品輸出を促進するといふことになりますと、勿論鋼材で賣込む場合もありますし、機械にして賣込む場合もありますが、大體に於て鐵鋼材の形ちで賣込むといふやり方は漸次困難が増して來るのではないか。もつとも支那などはまださうでもありませんが、滿洲は御承知の如く、既に鋼鐵業も自給自足の領域に達しつゝあるし寧ろ海外市場に進出して行かうといふことを考へて居るやうな時代であります。印度や濠洲といふ比較的大きい市場でも、漸次鐵鋼業が確立されて鐵の形では、餘り外國から輸入しなくなつて來ました。例へば印度の如きも一九一三年に於ては百三十萬噸から鋼材を輸入してゐたのであります。最近段々國内の鋼材の自給自足の能力が加はつて參り、それがため輸入が減り、僅かに三十萬噸の輸入をすればそれで濟むといふやうになつてしまつたのであります。その間に於て鋼材の生産能力は、僅々十萬噸見當から今日では九十萬噸まで發達してゐるといふ非常な勢ひで、自給自足計畫を進めて來たのであります。濠洲の如きも、大戰直前に於ては十九萬噸の鋼材製産能力であつたのが、今日では七十萬噸以上

の生産能力を有つて居ります。それがため大戰前までは七十萬噸以上鐵を輸入して居つたのが、今日に於ては僅か十數萬噸の鐵を輸入するに止つて居る。斯ういふ風に外國から鋼材の形では殆ど輸入をしなくなつて來て居ります。ですから若し今後重工品のマーケットを開拓するといふことになれば、鋼材の形で輸出を擴張するといふことには限度があるのでありまして、やはり本當の割合を加工して機械その他の形で賣込まなければ、大きなマーケットを開拓するといふことは困難になつて來るのではないかと思ふのであります。勿論さうすれば國内の勞働者を就業せしめることも多くなるし、同じ素材でも鋼材で賣る場合よりも手を加へますから、從つて非常に高いものにして輸出することが出來るのであります。どうしても機械の形にして輸出するといふことが今後の政策上の中心的な狙ひ處になつて來るのではないかと思ふのであります。

支那の重工品吸收力

そこで最後に、日本の今後の最も大きな輸出市場たる支那に於ける重業工品の需要狀態に就いて少し立入つてお話したいと思ひます。

支那は最近數年間必ずしも景氣はよくなかつたのであります。いろ〳〵天然の原因から來る禍ひもあつたし、或は政治上の搾取その他の關係から產業は決して順調に發達してゐたといふとは出來ないのであります。それにも拘らず、重工業品の輸入だけは最近數年間極めて旺盛に發達してゐたのであります。例へば金屬類の輸入を調べて見ますと、一九三五年に八千七百萬元でありましたものが、昨年は一億三千二百萬元に上つて居ります。機械、車輛類は、同じ間に約一億元から一億一千萬元に上つて居ります。金屬製品は三千萬元から四千萬元に上り、化學製品も三千七百萬元から六千二百萬元に上つて居る。斯ういふ風に支那としては殊に產業的に必ずしも惠まれてゐない時代の支那としては相當注目すべき增加を此の重工品の輸入の點では示してゐるのであります。勿論これは國家的な經濟建設工作が進んでゐたばかりでなく、いろ〳〵な國防的な要求に基く特別な政治的な意味での輸入も相當大きかつたと思ひますが、併しとも角も支那の重工品の吸收能力といふものは最近旺盛な發達を示してゐたのであります。最近數年間に於ける支那の輸入貿易に於て、最も重要な役割を占めてゐたものを第一位から第五位まで調べて見ますと、一九三二年に於ては、第一位は棉花、第二位米、第三位綿布、第四位石油、第五位金屬、斯ういふ割合ひで重工業品は僅に金屬だけが第五位に上つてゐるに止まつてゐました。そして全輸入額の僅か五パーセント强に止まつてゐたのであります。處が一九三六年の統計によりますと、第一位金屬（全體一一％强）第二位機械（六％）第三位化學製品及藥品（六％）第四位車輛（五％）第五位金屬製品（五％）といふ風に、第一位から第五位まで重工業品を以つて占めることになりました。第六位も化學品たる染料顏料であります。之に反して棉花、米、綿布、石油といふものは、第七位以下に落されたのであります、けだしこれは國內の自給能力が進んで來たためであらうと思ひます。同時に軍需品たる重工業品の輸入が非常な勢ひで吸收されつゝあつたと見ることが出來るのであります。金屬の如きは全體の十一パーセント、機械が六パーセント、化學製品が五パーセント、車輛五パーセント、金屬製品五パーセント弱これだけで全輸入の三十數パーセントといふものを占めて來るやうになりました。ですから支那のマーケットといふものは、國民政府の治下に於てさへ最近は非常な重工品を消費するやうになつてゐたことを御記憶願つておかねばなりません。それに反して輕工品に於ては、その輸入は國內產業に奪はれてしまつたのであります。

今後は益々擴大する

ところが今後は日本の政治的、經濟的な指導の下に、新な經濟建設に向つて急テンポな工作をなすといふことになり、又復興用、建設用に非常に多くの重工品を需要する段階に入つて行くのであります。かういふ新しい事態の下の支那のマーケツトは大いに期待が出來るのであります。以前から世界列國は支那の市場の重工業に於ける價値といふものをかなり重く見て居りました。例のロイド・ジョーヂの主宰してゐる研究會が發表した「イギリスの輸出促進政策」の中にも最も注目的な結論の一つとして、支那の大きなマーケツトを重工業的に開拓して行かなければならない。これがイギリスの貿易轉換の最も重要な一つのポイントであるといふことを力説して居ります。それからアメリカの經濟使節團が二、三年前支那から歸つて發表しましたレポートの中でも、支那に長期資本を貸付けることによつて支那の重工業市場をアメリカが把握しなければならない、といふことを旺んに强調大呼してゐたのであります。何れも事變來の狀態に卽した意見でありますが、それ程外國は支那の重工業市場の價値を大きく見て居たのであります。今や日本の政

治的指導の下に開發會社が出來、さうして復興及び新しい產業建設が着々進められ、地下資源の開發に力を注ぐやうになるのでありますから、自然それに必要ないろ〳〵の重工品の需要は非常に巨大なものとなるにちがひありません。之は今後の日本の重工業者に取つて、非常に注目すべき特殊の大市場たるものであつて海外進出の第一歩を築き上げるべき恰好な土臺となるものではないかと思ふのであります。

支那に於ける日本の重工品の進出

尙ほ序に一言しておきますが最近支那の重工業市場に於て、日本が一體どれ程の割合を占めてゐたかといふと先づ第一位の金屬でありますが、こゝでは第一位をドイツが占めて居ります。これが一千萬元——金單位で——日本が第二位で九百萬元、イギリスは一時日本を凌いで居りましたが最近では日本よりやゝ劣つて第三位におちておりました。アメリカは第四位。日本は金屬輸出に於ては極めて順調な發展を遂げてゐたのであります。

機械器具類に於ては、日本は第一位を占めて居ります。一九三六年に於て七百萬金單位を日本

が輸出してゐます。これは大部分紡績機械の輸出であります。日本の紡績業があちらに工場を建てるために必要な機械を輸入したのであらうと思ひます。日本を除いてはやはりドイツが優秀な位置を占め、第二位で六百萬金單位。その次がイギリス、アメリカといふ順になつて居ります。

化學工業に於てはドイツがズバ抜けて大きな位置を占めて居ります。卽ち千八百萬金單位、日本が六百萬金單位。第三位がアメリカ、第四位がイギリスであります。

金屬製品に於てはアメリカが第一位でありまして約八百萬金單位、ドイツが第二位で六百萬金單位、日本が第三位で三百萬金單位、第四位はイギリス。日本は主として電機材料品に於て進出してゐたのであります。さういふ譯で日本はまづ順調に發展を示して居ります。ドイツには劣つて居りますが、イギリス、アメリカとは優劣を競つてむしろ之を押へてゐたのであります。併しながら國民政府が、御承知の通り日本に對しては著しく冷遇的であつたのでありますが、今や政治關係がすつかり一新し、親日的な新政權が北支にも中支にも出來、フエア・プレーによつて日本の優秀な製品がドシ〳〵進出するといふことになるのでありますから、今後の日本の對支重工業輸出といふものは相當注目すべき飛躍をなすことが出來るだらうと思ふのであります。又、斯ういふ風にして、今後支那を中心にして日本の重工品は海外にドン〳〵伸びて行かなければならないのであります。

重工品輸出の促進工作

輕工品と違つてどうしても長期信用、或は保險制度或は損失保證制度等々……さういふ風な特別な政府の助成工作が重工品輸出には必要であるといふことは周知の通りであります。外國では先程申したやうに、國內向けの値段に對する外國賣りの値段は場合に應じて半分位の安値でもダンピング致して居ります。然も政府はいろ〳〵な形ちで之を助成して居るのであります。イギリス、ドイツ等は支那のマーケツトでは五年乃至十年といふ長期信用を與へて居る例は稀らしくはないのでありまして、さういふ點にも、どうしても輸出業者と政府と金融業者とは手を握らなければならないのであります。國策的な金融機構が出來て、國家の保護の下に組織的に輸出業者とタイアツプして進んで行かなければならない時代となつたのであります。この際經濟聯盟や東京の商工會議所あたりでは既にさういふ重工品の輸出促進のために、一大國策會社を作つて、一つ

の團結した力に於て海外にダンピングして行くことにしやうではないかといふ考へで案を練つてゐるのでありますが、政府でもさういふ考へが、大藏省や商工省の人々の間に有たれて居るやうに聞いてゐるのであります。併し亦反面此のやり方にはいろ〳〵な弊害もあり、むづかしい問題を提起すると思ひますが、外國の例を見ても有力なカルテルとかトラストをつくつて組織的ダンピングをやらせ、政府がそれを強く援助して進んで行く、又大銀行が長期信用をそれに與へるといふ風な緊密な國策的助成工作が採られてきてゐるのであります。日本でも、これから積極的に海外に乘り出さうといふ時代には特にかゝる助成工作が必要になつて來ると思ひます

長期資本輸出が先行條件

そこで此の話しを終るに當つて特に重ねて一言申し添へておきます。

前にも度び〳〵述べましたやうに、日本の重工品はさし當り、やはり支那市場を中心として海外に伸びて行かねばならないのでありますが、支那市場には、正當な意味のマーケットたるべき購買力が今日では著しく缺乏してゐるのでありますから、日本の重工品を買はせるためには先づ

もつて、充分な購買力附與工作が必要であります。

支那の治安を復興し、原始的農產物及鑛產物をドシ〳〵開發させて彼等の購買力を增大せしめることが何よりの第一要件ではありますが、更に進んで、長期信用を與へて、產業建設用の資材を日本からドシ〳〵買はせるやうに致さねばなりません。

要するに、日本の大國策としての大陸開發事業が活潑に進行すればそれだけ支那の日本重工品に對する需要が增加することは丁度滿洲國の場合と同じであります。

そうしますと、さし當り開發資金は日本が中心となつて面倒をみてやらねばなりませんから、その負擔は相當大きいであらうと思はれます。日本の財政、金融はそれだけ苦しむ譯であります。それを嫌がつてゐては支那の購買力は起らず、從て日本重工品の賣れ行きも振はない譯です。

こゝに、日本重工業發展の前途に於ける大なる難關があるのであります。又こゝに非常時日本の困難の表現があるのであります。

しかし、更に根本的に考へ直してみると支那開發用の投資は決して無駄な棄て金ではありません。大きくみれば日支共存共榮のための貢獻であるし、日本のためには國防資源確保の途でもあ

ります。この投資によつて將來支那の民族産業が繁榮することになれば、それこそ今日の投資は何倍かになつてわれ〳〵の子孫に酬ゐられてくる筈のものであります。われ〳〵は目先いかに苦しくとも、將來の大きな繁榮を目標として、此の苦難に耐へて一意積極工作の途を邁進せねばならないと思ひます。

既にさういふ根本方針が確立されさへすれば、日本重工業の前途も亦いさゝかの不安なく、大樂觀に歸する外はないと存じます。今日の爲政家も財界指導者も此點を特に充分お考へになることを切に要望して此の話しを終ります。

（完）

（附錄）重工業に關する若干の統計資料

（一）新興國別鋼生産高（單位千グロス噸、鑄物鋼を含む）

	一九二九年	一九三七年	一九二九年を一〇〇とする指數
（舊來の製鐵國）			
合衆國	五六、四三三	五一、六〇九	九一
獨逸（ザールを含む）	一八、一六〇	一九、三八〇	一〇七
英國	九、六三六	一二、九〇〇	一三四
佛國	九、五四四	七、八二五	八二
ベルギー及ルクセンブルグ	六、七二五	六、三九〇	九五
オーストリア及チエコスロヴアキア	二、七二五	二、九一五	一〇七
スエーデン	六八三	一、〇六〇	一五六
計	一〇三、九〇六	一〇二、〇七九	九八
（新興國）			
ソ聯	四、八二八	一七、〇〇〇	三五二

日本（滿洲を含む）	二、三四九	六、000	三六九
伊太利	二、一〇九	二、100	100
カナダ	一、三九一	一、四四五	一〇三
英領印度	一、三六五	一、三八五	一〇二
ビルマ	五四五	一、100	一九一
蘭領印度	五〇五	六六五	一三二
滿洲	四六〇	八九〇	一八九
計	一三、四三二	三〇、五六五	二三九
世界總計	二八、九六三	一三、八四二	二二三

（二）列國機械生産高表（單位十億ルーブル——一九二六、七年の價格）

	一九二九年	一九三五年	一九三六年
米國	四八・六	五六・九	一
蘇聯	二・一	一四・一	一九・五
伊太利	一四・一	一二・四	一四・四
佛國	二二・二	二二・三	二二・七
英國	五・七	三・五	三・五
日本	一・四 ×	三・五	三・六

× 一九三〇年ノ分

（三）人口一人當り鋼消費高（單位ポンド）

	一九二九年	一九三六年	一九三七年
合衆國	九九	八三	八四
ベルギー・ルクセンブルグ	九三七	六〇二	七四六
獨逸	四三八	五三八	五四八
英國	五八一	五〇〇	五四八
佛國	二八八	二七九	三一八

日本	—	一六	一六
聯邦	—	一四	一五
イタリー	—	一〇	一〇

（註）スチール誌調べ。國内生産に輸入を加へ輸出を差引き、得たる數量を人口を以つて除したるもの。

（四）日本工業生産中に於ける重工業と輕工業の割合表

産業別生産額（單位百萬圓）

	昭和六年	七年	八年	九年	十年	十一年
紡織工業	一、九三六	二、二二二	二、九一四	三、一六四	三、三三二	三、六四四
金屬工業	四三一	五九一	七四八	一、四九六	一、八六一	二、二〇八
化學工業	八六六	九三四	一、二八八	一、四八〇	一、八二三	二、一一一
機械器具	四九八	五九八	六八八	一、一五九	一、四五三	一、七一六
食料品工業	六三四	六九三	一、〇一七	一、四五六	一、一六八	一、二五九
窯業	一四四	一六一	二二〇	二五一	二六三	二五九

製材及木製品工業	一四六	一五八	一八九	二二八	二四八	二八〇
印刷製本業	一七六	一七四	一八一	二〇三	二二四	二二五
瓦斯及電氣	一四	一三	一四	一九	二一	二一
其他工業	一八四	二二四	二七八	三三五	三八一	四四〇
總額	五、一四四	五、九八二	七、八七一	九、三九〇	一〇、八六六	一二、二二四

産業別生産額（百分比）

	昭和六年	七年	八年	九年	十年	十一年
紡織工業	三七・二	三七・〇	三七・〇	三三・七	三一・〇	二九・八
金屬工業	八・三	九・九	一一・二	一五・九	一七・四	一八・〇
化學工業	一五・八	一五・七	一六・四	一六・〇	一六・七	一七・二
機械器具	九・六	一〇・〇	一一・三	一二・三	一二・五	一四・〇
食料品工業	一六・二	一四・九	一二・九	一一・一	一〇・八	一〇・一
窯業	二・八	二・七	二・八	二・七	二・六	二・七

製材及木製品工業	二・八	二・六	二・四	二・四	二・五	二・三
印刷製本業	三・四	三・〇	二・五	二・三	二・一	一・九
瓦斯及電氣	〇・五	〇・二	〇・三	〇・四	〇・二	〇・三
其他工業	三・六	四・〇	三・六	二・一	三・六	三・九
總額	100・0	100・0	100・0	100・0	100・0	100・0

（國際經濟週報三月三十一日）

（五）日本重工業品貿易表

重工業關係品輸入表（千圓）

	十二年	十一年	十年	九年	八年	七年	六年
重工業品輸入合計	一、四三八、九七〇	七六八、三八八	七三一、四六九	六二二、四六三	四八二、三八三	三四〇、〇三四	二七八、五一四
內譯							
藥材、化學藥及爆發藥	二五一、八四〇	一九六、三五〇	一五七、三一四	一四四、二九三	一〇八、六五三	八〇、九九二	八一、六一四
染顏塗料及塡充料	三〇、五六〇	二三、四六一	二〇、六二二	一八、五七九	一六、九九一	一七、〇八二	一四、四七八
鐵及金屬	九〇一、一三〇	三四、八九七	三八三、九九四	三〇七、三〇九	二二三、六三二	二二四、四四四	八、六六二
金屬製品	一三、一二九	一〇、五八八	一〇、六六一	八、七〇六	六、三三三	七、五二二	一二、一二六
鐘時計、砲、船、學、車、衛、機器	二四二、二〇一	一四〇、六六	一五八、九九四	一四三、三八	一〇六、七二二	九三、九四四	八一、六〇一
重工業品輸入總計に對する輸入總計の%（重輸入）	三、九八三、一七七	二、七三三、三四六	二、四六六、四〇	二、二七七、二二二	一、九二二、一二九	一、四二七、四六八	一、二三一、七三四
	九・〇	三一・一	二六・六	二七・三	二五・二	二二・七	二二・四

（備考）外國貿易年表、外國貿易月表より作成

重工業關係品輸出表（千圓）

	十二年	十一年	十年	九年	八年	六年	四年
重工業品輸出合計	五四一、九二二	四三四、六〇五	三八四、〇九三	三二六、九二〇	二二〇、五九四	九六、四九〇	二二三、三〇八
內譯							
藥材、化學藥及爆發藥	七〇、一四八	六二、一七七	六一、一三三	五二、四六〇	四八、二〇三	二二、一七一	一四、七二一
染顏塗料及塡充料	二〇、五三〇	一六、三二二	二〇、三一〇	一五、五一八	一一、七四一	四、二二八	五、一三四

業		工	業	工	業	重	工
		鑛	業	鑛	業		
九年	十年	十年	十年	昭和		昭和	
九、三四〇	一〇、六四六	一一、三五七	一一、三五七	三、四三六	六、〇四六	一、六四六	四、一三六
一、六六五	二、四六六	二、四六六	二、四六六	一、〇一六	一、三六六	一、三四	一、三六六
一四・六	一四・六	一四・六	一四・六	一、四三一	一、六六九	一、六六六	一、六六六
一四・〇	一四・〇	一四・〇	一四・〇	一、六六〇	一、六四〇	一、六六〇	一、六四〇
一三・六	一三・六	一三・六	一三・六	一、六六九	一、六六九	一、六六六	一、六六六
一四・四	一四・四	一四・四	一四・四	一、六六六	一、六六六	一、六六六	一、六六六

重工業出荷総計に占める%の比率	輸出総計	鉄鋼及金属製品	金時計、砲船、車輌機械
一七・〇	三、七六六、〇	一三、三四三	九、八二二
一六・三	二、六九九、〇	一〇、〇六六	七、六四六
一五・三	二、一四九、〇	六、六六六	四、一四三
一五・〇	二、一六一、〇	七四、九〇	五、六〇四
一一・六	一、六六一、〇	一四、一〇四	六、六一四
八・四	一、一四六、六	一四、一六六	三、九六〇
五・七	二、一四六、六	一、九五〇	一、六六一

備考（）外國貿易年表、月表より作成。（兩表共エコノミスト・三月一日號による）

（六）日本工業の生産と輸出額

工業の輸出依存度（單位百萬圓）

工業全	生産額	輸出額	依存度
昭和六年	五、九一四	一、〇四〇	一七・七%
七年	五、一四四	一、三四四	二二・一
八年	六、六六三	一、六六六	二六・六

業				
十年	五、一五八	四四〇		九・一
十一年	六、〇三六	五三四		八・九

（國際經濟週報三月三十一日）

重工業の生産と輸出入割合（單位百萬圓）・（＋）出超）

		生産額	輸入額	輸出額	入超額	輸入依存
化學工業	昭和六年	八一六	一三三	五九	七三	一六・三%
	七年	九三七	一四四	六九	六四	一四・三
	八年	一、一三八	一四四	一〇三	四〇	一一・一
	九年	一、四六〇	一五一	一一四	三六	一〇・三
	十年	一、八一三	一七五	一六七	八	九・六
	十一年	二、一一〇	一五一	一八三	＋三	七・一
纖	昭和六年	四九八	八三	二九	五三	一六・四

機械工業	七年	五九八	九六	三四	六一	一六・〇
	八年	八八八	一一〇	六七	四八	一一・四
	九年	一、一五九	一四七	一三四	一一	一一・七
	十年	一、四六二	一五八	一四一	一七	一〇・八
	十一年	一、七一六	一五三	一七四	＋一一	八・九
金屬工業	昭和六年	四三一	八七	四四	四三	一一〇・一
	七年	五九一	一一五	四四	七一	一九・五
	八年	八七八	一一一七	九〇	一一一七	一四・七
	九年	一、四六六	二八八	一三一	一五六	一九・一
	十年	一、八八一	二五〇	一五九	一九〇	一八・六
	十一年	二、一一〇八	二四四	一七五	一五九	一五・一

（同　上）

（七）日本鐵鋼輸出入表

四二

	昭和九年		同十年		同十一年	
	千瓲	百萬圓	千瓲	百萬圓	千瓲	百萬圓
入輸 合計 鐵鋼	二、一三三	一九・四	三、四〇四	三四・五	三、七六〇	四〇・〇
入輸 合計 銑鐵	六一四	三六・五	九六二	四一・二	九七二	四二・一
入輸 合計 錠塊	八	七・四	二二八	一八・二	二〇七	一五・五
入輸 合計 鋼材	〇・一	〇・八	〇・二	〇・六	〇・〇	〇・四
入輸 合計 屑鐵	三七一	七二・一	三一五	六三・八	二六六	五四・一
入輸 合計 計	一、四一三	六五・七	一、六九二	八四・二	一、四六七	八〇・九
出輸 計 鐵材及錠塊	四、六一九	一九二・〇	六、六〇一	二四二・七	六、二三三	二三三・一
出輸 計 錠塊	五	一・一	一四	二・五	一二	三・二
出輸 計 鋼材	三六五	五七・八	四四九	七一・四	三五八	六二・八
出輸 計 屑鐵	一八	〇・九	一六	一・〇	一二	〇・八
出輸 計 計	三八八	五九・八	四六三	七二・三	三六二	六六・八

大藏省「外國貿易月表」より算出。鋼材には軍需、建設材を含む。（日本國勢圖會による）

（八）主要國鐵鋼貿易表（スクラップを除く、單位千噸）

	一九一三年	一九三四年	一九三五年	一九三六年	一九三七年
輸出 合衆國	一、六四八	六六七	一、〇一〇	一、一一一	二、四〇二
輸出 英國	四、六六四	一、一三二	一、二二一	一、一〇三	一、六〇〇
輸出 獨逸國	六、一〇〇	一、四一九	二、〇六九	二、三六〇	二、七一〇
輸出 佛蘭西國	六四〇	二、〇三〇	一、六四一	一、三七三	一、〇三〇
輸出 ベルギー及ルクセンブルグ	一、三六〇	二、二四二	二、一一九	二、一六九	四、〇〇〇
輸出 計	一六、〇〇七	一一、〇四四	一一、四三一	一一、七四一	一六、七六〇
輸入 合衆國	一一七	一一一	四〇三	三一三	三〇〇
輸入 英國	一、二三一	一、三六七	一、一三一	一、四六二	一、六〇〇
輸入 獨逸國	二〇〇	一、二七七	六二三	三〇六	四七三
輸入 佛蘭西國	一六一	一一〇〇	一七〇	一七三	一七〇

ルベ ルクセンブール及ゲ 計	六七四	三五六	二九七	四〇四	四四五
	三、九六五	三、五三二	二、六五九	三、〇二五	三、三九〇

（註）獨逸は一九一三年ザール及ルクセンブルグを合み、一九三五年以降ザールを合む。フランスは一九三四年ザールを合む。ベルギー及ルクセンブルグは一九一三年ベルギーのみ。

（九）日本機械類生産及貿易表（單位千圓—%）

	生産額	輸出入貿易額 輸入額	輸出額（ス生産ル割ニ合對）	差引超過額	需要額内地	需要額ニ對スル輸入割合
昭和元年	五三八、九一七	一五一、九三七	二五、一八四（四・七）	(-) 一二六、七四三	六五五、六六〇	二三・八
六年	四四三、三四〇	八〇、五三〇	二九、八二〇（六・七）	(-) 五〇、六四〇	四九三、九八〇	一二・六
七年	五四三、八四二	九三、九五六	三四、六九九（六・五）	(-) 五八、二三七	六〇三、〇二九	一五・五
八年	八〇五、一一五	一〇六、五四四	六七、六三三（八・四）	(-) 三八、九五三	八四四、〇六七	一二・六
九年	一、〇八二、〇二三	一四三、五八〇	一四二、九八二（一一・五）	(-) 一、六〇八	一、一〇〇、六八〇	一三・〇
十年	一、三八〇、五五八	一五八、九八四	一四一、一〇五（一〇・二）	(-) 一七、七七九	一、三九八、三三七	一一・四
十一年	………	一五三、〇六六	一七四、五四一（……）	(+) 二一、四五五	……	……

（備考）一、生産額は商工省工場統計、輸出入額は大藏省貿易統計に依る。二、……印は調査なく不明。三、差引超過額欄中(-)は入超額、(+)は出超額を示す。
（科學主義工業、十二年九月號乘杉氏論文による）

（十）日本機械器具輸出國別表（單位圓）

	昭和九年	十年	十一年
滿洲	三、三六、七四五	五、六〇七、三五五	六、三六九、八五七
關東州	三九、四二九、二三八	二二、七七八、六六二	四一、一六五、八五六
支那	九、六九一、四八五	一五、三一〇、三二二	一六、九三五、六五二
香港	一五六、八二二	一九四、七六〇	一三六、〇〇九
英印	二、二二二、九六〇	三、五〇、八四二	二、九六八、九九六
蘭印	四二六、三一四	八〇二、七七一	九六七、八三〇
亞印	一、一二九、四九五	一、一〇三、四九六	八六二、二六八

比律賓	二六、八六六	三八、四二一	五〇四、七四九
伯剌西爾	一五〇、一七九	二〇三、八二九	三七六、七五五
濠洲	五〇、一三三	一一四、〇九四	一八、四二一
計（其他共）	五七、七七、二二九	六三、八六六、〇〇〇	二、〇四〇、六四〇

（日本工業年鑑による）

（十一）最近五ヶ年間支那貿易輸入品の種類

年次	（順位）第一位	第二位	第三位	第四位	第五位	第六位
一九三二年	棉花 二一・四%	米 一一・三%	綿布 六・九%	石油 五・七%	金屬 五・七%	小麥 四・九%
三三年	米 一一・二	棉花 七・三〇	金屬 七・二〇	小麥 六・五四	石油 六・四九	綿布 四・三
三四年	金屬 九・六〇	棉花 八・七〇	米 六・三八	機械 五・七六	化學製藥品及 四・〇四	石油 三・八六
三五年	米 一〇・二五	金屬 九・四五	機械 七・〇六	棉花 四・五五	紙 四・一八	石油 四・一〇
三六年	金屬 一一・四七	機械 六・三七	及化學藥品製 五・五一	車輛 五・三六	金屬製品 四・九六	顏料及染料 四・三七

（十二）支那貿易輸入品國別表

（イ）金屬輸入國別表（百萬金單位）

	一九三四年	三五年	三六年
ドイツ	六・九	一〇・七	一〇・二
日本	五・六	七・六	九・二
英國	三・八	九・八	八・七
米國	八・三	六・五	七・〇

（ロ）機械工具輸入國別表（百萬金單位）

	一九三四年	三五年	三六年
日本	四・七	七・三	七・四
ドイツ	五・一	八・九	五・六
英國	一〇・二	七・九	五・〇
米國	四・七	五・三	三・一

（ハ）同上、化學工業品（百萬金單位）

	一九三四年	三五年	三六年
ドイツ	一五・三	一五・九	一七・八
日本	六・一	七・〇	六・〇
米國	六・〇	五・五	五・一
英國	四・九	五・四	四・二

（ニ）同上、金屬製品輸入（百萬金單位）

	一九三四年	三五年	三六年
米國	五・四	四・二	七・七
ドイツ	七・四	五・四	六・〇
日本	三・〇	三・六	三・一
英國	四・〇	二・六	一・九

（以上——一三、四・四）

昭和十三年五月五日印刷
昭和十三年五月八日發行

神戸經濟倶樂部講演第一輯

非賣品

編輯兼發行者　神原周平
東京市日本橋區本石町三ノ二

印刷者　本間十三郎
東京市牛込區矢來町三十六

發行所　東京市日本橋區本石町三丁目二
東洋經濟出版部
振替口座東京六五一八番

不許複製

神戸經濟倶樂部講演

—(1)—

東京＝清揚社印刷＝牛込

終